

Emily Mae SMITH

Warrior Goddess

November 2019

Warrior Goddess

250

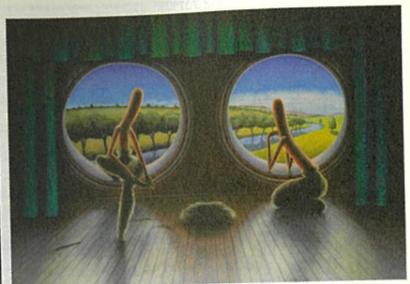


vol.7 Emily Mae Smith

artist

フェミニズムや資本主義をテーマにした作品で異彩を放つアーティストのエミリー・メイ・スミス。ペロタン東京での個展に出発する直前のエミリーをブルックリンのスタジオに訪ねた。

Interview : Yumiko Sakuma Photo : Naoko Maeda Edit : Michie Mito



1



2



3

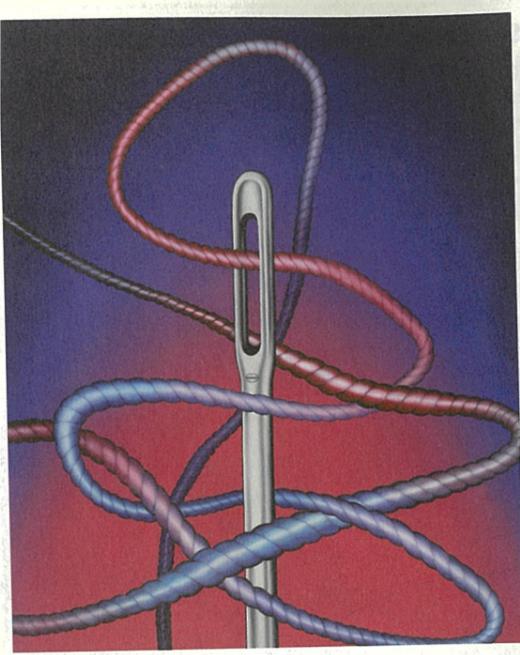


4



5

1. ほうきの形をした女性像が頻りに登場する。「Brooms with a View」(2019) 2. 「Gleaner Odalisque」(2019) 3. ペロタン東京で開催中の個展「アヴァロン」は11月9日まで。4. 「Medusa Moderne」(2018) 5. 「Unruly Thread」 Photos : Charles Benton (1) Maiko Miyagawa (3) Dario Lasagni (4)



(1, 5) Courtesy of the artist and Wadsworth Atheneum Museum of Art (2, 3, 4) Courtesy of the artist and Perrotin

Q: どの子どもでもしたか?
A: テキサスの田舎で、マス文化からは孤立した環境で育った。内向的で読書や絵を描くのが好きだった。極度な近視だったんだけど、学校に行くまで気がつかなかったの。小学1年生のときに初めて眼鏡を掛けて視界が突然シャープになって、すべてがクリアに見えるという体験をした。新しい贈り物もらったような感じ! それがアーティストとしての訓練になったかもしれない。最近ふと思ったの。子どもの頃からアーティストになることが目的だった。

Q: アーティストになるというドラッグはどこから来たのでしょうか?
A: 幻想的というくらい自信があったの(笑)。でもここまで自分の力だけで来たとは思っていない。両親は貧しかったけれど、アートをやることに反対はしなかったし、自分は健康な体を持ち、白人で、そういうことによつて見えない援助をいろいろな形で受けてきたと思う。
Q: アーティストにとつては技術も大切だけれど、何を伝えたいかという問題もありますよね。
A: それについてはぜひぶん葛藤した。自分が女性であるという自覚を持つのが遅くて、おそらく大人になるまで理解していなかった。アートの学校を卒業して、グループ展に出る、やれることはすべてやっていると、やれることに思っただけで進めずなのに、思うほどには前へ進めなかった。真剣に受け止めてもらえないと感じたり、得られる報酬が男性より低い、というような体験を通じてジェンダーのことを初めて考えるようになったのね。2008年に不景気がやって来て、

スタジオを手放さなければならなかった。アパートに作業の場を移して、当ても好きだった大判の作品を作ることができなくなって、それまで存在していたものやスタイルと別れる中で、自分は何者なのか、本当に描きたいものは何かを突き詰めて考えることになった。それまで自分が女性であること、フェミニズムやジェンダーをテーマにするとアート界に真剣に受け止めてもらえないのではないかと、その話題は好まれないなどと考えて、女性としての自分を抑圧していたと思う。その作業をすすめるまで、大人になりきれでなかったと今は思う。

Q: 女性がフェミニズムを取り上げるとフェミニ・アートのカテゴリーに入れられてしまう時代があったほど難しいテーマですよね。
A: それまでの自分は「真剣なアート」にとらわれすぎていたし、その問題を扱う言語を持たなかった。そこで、自分の作品に「ユーモア」を入れるようになった。女性たちの社会における立場や制度上の問題という敬遠されがちなテーマを取り上げながら、罪悪感やヘイトを喚起するのではなく、人々とコネクトするための存在として試みたら、自分が伝えたかったことをつなげることができて、納得できるようになった。伝えたいことはあるけれど、道徳的な説教をしたわけではないから。
Q: 今、東京で開催中のショーについて教えてください。
A: タイトルの「アヴァロン」は、空想上のパラダイスをイメージして付けたの。神話がインスピレーションを与えてくれることが多いのだけれど、楽園と腐敗という虚偽の二項

対立がテーマになっている。今の世の中で顕著になっているファンダメンタリズム(原理主義)や白人国粹主義などの極端な思想は、どこかに理想郷があるという幻想に基づいている。かつてアダムとイブが楽園に住んでいて、イブが楽園を破壊したと言ひ伝えられてきた。けれど神話が幻想なのであって、その破壊や腐敗と思われるようなものに美しさがあるはず。例えば一つの作品では、女性の完璧な肌が纏うガーターベルトやストッキングがエロティックな存在として登場するのだけれど、近くで見ると、それはネズミでできている。女性の肉体の「理想」や性的な対象としての女性に対するイメージをあぶり出したかった。楽園と腐敗、理想的な場所と、それを「腐敗」させる存在としての女性を描いたつもり。
Q: 女性であることを常に考えさせる時代を生きていますよね。
A: 本当に! 今、男たちがつくった世界に対して、行動を起こすための才能と道具を与えられた女性がたくさんいる。だから、全員がそれを使わないと! とてもエキサイティングなことが起きているのだから。

Emily Mae Smith
テキサス大学卒業後、コロンビア大学で修士号を取得。ブルックリンを拠点に活動する。シュールレアリスム、ポップアート、シンボリズムなどを踏襲しながら、家事を象徴するモチーフを多用して社会における女性像を描く。ペロタンギャラリーに所属。写真はスタジオにて愛犬ソニーと。

佐久間裕美子
ニューヨークと東京を行ったり来たりするライター。最新作は『真面目にマリファナの話しよう』(文藝春秋)。noteでパーソナルな不定期日記「明日は明日の風が吹く」も連載中。最近、ウェブサイトを新しくしました。yumikosakuma.com